

# 演劇初心者の演技計画における熟達支援の効果 Effects of Instructions to Promote Expertise for Novice Actors in Planning Actions

安藤 花恵<sup>1</sup>, 三浦 佳世<sup>2</sup>, 田泓 明日香<sup>3</sup>  
Hanae Ando, Kayo Miura, Asuka Tabuki

<sup>1</sup>九州国際大学, <sup>2</sup>九州大学大学院人間環境学府, <sup>3</sup>九州大学文学部

<sup>1</sup> Kyushu International University, <sup>2</sup> Graduate School of Human-Emvironmental Studies, Kyushu University, <sup>3</sup> School of Letters, Kyushu University

<sup>1</sup> h-andou@law.kiu.ac.jp

## Abstract

We aimed to investigate the effects of instructions to promote expertise in planning actions. Eight novice actors planned actions without instructions, and other 8 novice actors planned actions, being instructed to “consider how audience watch the actions”, “consider context of the scenario”, and “plan various aspects of actions”. Actors with instructions considered audience and context of the scenario more, produced more aspects of actions, and as a result, produced much more actions than actors without instructions. Moreover, it was supported that this educational effects lasted also when planning actions of another scenario.

**Keywords** — expertise, actor, educational effect

熟達化研究においては、ある領域における初心者と熟達者を比較して、その違いを明らかにする研究が多い。しかしそれでは、初心者と熟達者の「差」は明らかになっても、その「差」を埋めるためにはどうすればよいのかは明らかにならない。そこで、本研究では、初心者と熟達者の差を埋めるための支援をおこない、その効果を検討することとした。

安藤(2005)は、演劇の初心者群(経験1年未満)・中間群(経験1~5年)・準熟達者群(経験5年以上)が演技計画を立てる様子を比較し、準熟達者は具体的な演技計画を多く立てるのに対し、初心者は脚本解釈止まりで演技計画をあまり立てていないことを明らかにした[1]。また、準熟達者は観客の視点に立ち、観客にどのように見えるかを考えながら演技計画を立てていること、俳優の視点から、広く脚本の文脈やテーマなども考慮しながら演技計画を立てていることも明らかになった。そこで、演劇初心者に対し、演技計画を立て

方を準熟達者に近づけるような熟達支援をおこない、その効果の検討をおこなうことを目的として実験をおこなった。

## 方法

**実験協力者** 演劇経験1年未満の初心者俳優(全員女性)16名であった。うち8名は熟達支援をおこなわない統制群、8名は熟達支援をおこなう実験群とした。

**材料** 女性の1人芝居の脚本を2種類用意した。三原世司奈作『ノーブレス』の一部分を脚本A、野田秀樹作『売り言葉』の一部分を脚本Bとして使用した。

**手続き** 個別実験であった。

統制群: まず脚本Aを渡し、一読してもらった後、この脚本を演じるとしたらどのように演じるか、そう思う理由も含め、話すよう教示した。脚本Aについて自由に演技計画を立ててもらった後、脚本Bについても同様の手続きをとった。会話は、実験協力者の許可を得た上ですべて録音した。

実験群: まず脚本Aを渡し、一読してもらった後、この脚本を演じるとしたらどのように演じるか、そう思う理由も含め、話すよう教示した(脚本A-1回目)。脚本Aについて自由に演技計画を立ててもらった後、「観客からどのように見えるかを意識して計画を立ててください」、「脚本全体の流れや脚本自体の特徴、テンポを考えて計画を立ててください」、「表情や声、動作など色々なことに気を配ってみてください」という3つの指示を、紙面と口頭の両方で示した<熟達支援>。そして、

この3つの指示に従いながら、もう一度脚本Aについて演技計画を立ててもらった（脚本A-2回目）。その後、脚本Bについても自由に演技計画を立ててもらい、語ってもらった。脚本Bについては、熟達支援はおこなわなかった。会話は、実験協力者の許可を得た上ですべて録音した。

## 結果

### 熟達支援の直接的な効果

初心者俳優に対し、演技計画を熟達者のものに近づけるような指示を出しながら演技計画を立てさせた場合、どの程度効果があるのかを検討するため、実験群における脚本A-1回目とA-2回目の演技計画を比較した。実験群における、脚本A-1回目とA-2回目それぞれの「演技計画数」、「観客からの見え方を意識して出た発言の数（観客）」、「脚本の広い文脈を考えて出た発言の数（文脈）」、「演技計画における表情、声、動きなどのバリエーションの数（種類）」の平均を、表1にまとめた。なお、演技計画のバリエーションとは、演技計画を話し方（「早口で言う」など）、方向（「観客の方を向いて言う」など）、動作（「頷く」など）、表情（「満面の笑み」など）、声（「太い声で言う」など）、間（「ちょっとした沈黙を置く」など）、位置（「観客から見やすい位置にいる」など）、演出（「布をスルスル下ろしてもらって」など）に分類し、1人の実験協力者が立てた演技計画の中に、この分類が何種類あるかカウントしたものである。

表1. 実験群におけるA-1回目とA-2回目の比較

	計画数	観客	文脈	種類
A-1	5.50 (3.90)	0.25 (0.66)	0.38 (0.48)	0.88 (0.93)
A-2	15.25 (7.60)	4.13 (2.20)	4.00 (3.64)	3.38 (1.22)

( ) 内は標準偏差

A-1, A-2を被験者内要因とする一要因分散分析の結果、演技計画の数 ( $F(1,7)=19.32, p<.01$ )、観客の視点で考えた発言数 ( $F(1,7)=19.61, p<.01$ )、文脈を考えた発言数 ( $F(1,7)=6.24, p<.05$ )、演技計画のバリエーション数 ( $F(1,7)=35.00, p<.01$ )、

すべてにおいてA-1回目よりもA-2回目の方が数が多いことが明らかになった。

### 熟達支援の効果の持続

熟達支援の効果が、支援後も持続するかどうかを確かめるため、熟達支援（統制群・実験群）を被験者間要因、脚本（A・B）を被験者内要因とした2要因分散分析をおこなった。なお、この分析に使用した実験群・脚本Aのデータは、A-1回目のデータであった。

まずは、演技計画の数の平均を図1に示した。

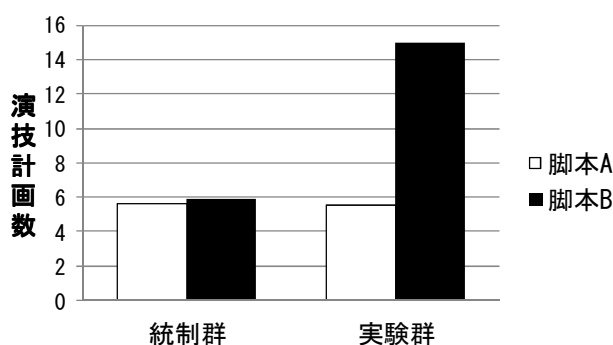


図1. 統制群・実験群の演技計画数の平均

分散分析の結果、熟達支援と脚本の交互作用が有意であった ( $F(1,14)=11.48, p<.01$ )。多重比較の結果、脚本Bにおいて統制群より実験群の方が演技計画数が多いこと ( $F(1,28)=13.01, p<.01$ )、実験群において脚本Aよりも脚本Bの方が演技計画数が多いことが示された ( $F(1,14)=24.21, p<.01$ )。脚本Aでは両群の立てた演技計画数は変わらず ( $F(1,28)=0.00, n.s.$ )、また、統制群においては脚本による差はなかった ( $F(1,14)=0.02, n.s.$ )。

次に、観客からの見え方を意識した発言数の平均を図2にまとめた。

分散分析の結果、熟達支援と脚本の交互作用が有意であった ( $F(1,14)=4.95, p<.05$ )。多重比較の結果、脚本Bにおいて統制群より実験群の方が観客からの見え方を意識した発言数が多いこと ( $F(1,28)=13.52, p<.01$ )、実験群において脚本Aよりも脚本Bの方が観客の視点から出た発言数が多いことが示された ( $F(1,14)=13.84, p<.01$ )。脚本Aでは両群の発言数は変わらず ( $F(1,28)=0.32, n.s.$ )、また、統制群においては脚本による差はな

かった ( $F(1,14)=0.33, n.s.$ ).

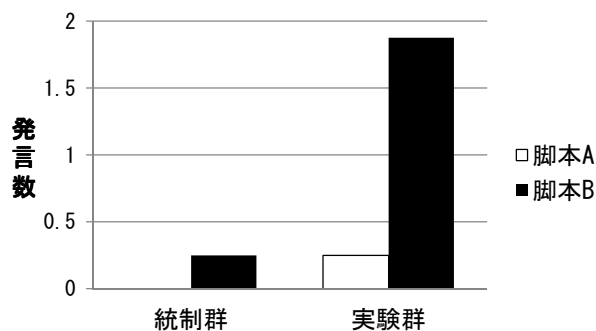


図 2. 統制群・実験群の観客の視点から出た発言数の平均

次に、脚本の文脈を広く考慮して出た発言数の平均を図 3 にまとめた。

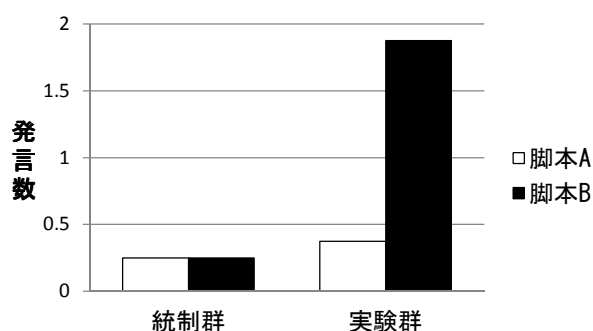


図 3. 統制群・実験群の文脈を考慮した発言数の平均

分散分析の結果、熟達支援と脚本の交互作用に有意傾向が認められた ( $F(1,14)=3.15, p<.10$ ). 多重比較の結果、脚本 B において統制群より実験群で文脈を考慮した発言数が多いこと ( $F(1,28)=7.08, p<.05$ ), 実験群において脚本 A よりも脚本 B で文脈を考慮した発言数が多いことが示された ( $F(1,14)=6.30, p<.05$ ). 脚本 A では両群の発言数は変わらず ( $F(1,28)=0.04, n.s.$ ), また、統制群においては脚本による差はなかった ( $F(1,14)=0.00, n.s.$ ).

最後に、演技計画のバリエーション数の平均を図 4 にまとめた。

分散分析の結果、熟達支援と脚本の交互作用が有意であった ( $F(1,14)=4.71, p<.05$ ). 多重比較の結果、実験群において脚本 A よりも脚本 B の方が演技計画のバリエーション数が多いことが示された ( $F(1,14)=7.92, p<.05$ ). 脚本 A ( $F(1,28)=1.50,$

$n.s.$ ), 脚本 B ( $F(1,28)=1.50, n.s.$ ) とともに、両群の発言数は変わらず、また、統制群においては脚本による差はなかった ( $F(1,14)=0.07, n.s.$ ).

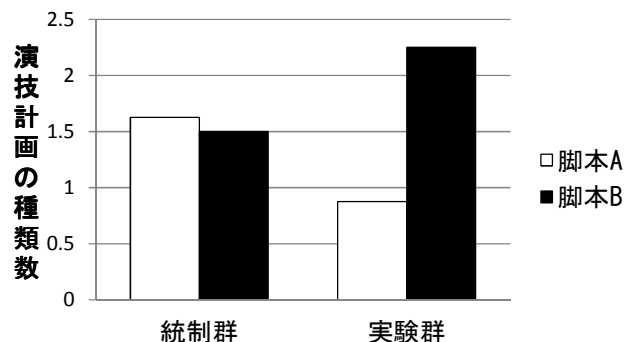


図 4. 統制群・実験群の演技計画のバリエーション数の平均

## 考察

安藤 (2005) で示されたとおり、演劇初心者は、何も指示をしなかった場合、演技計画をあまり立てず、観客の視点に立って演技計画を考えたり、脚本の広い文脈を考えたりすることがほとんどないことが明らかになった。また、演技計画を立てる場合も、たとえば話し方についてのみしか考えないなど、演技計画にバリエーションがないことも新たに明らかになった。

しかし、「観客からどのように見えるかを意識して計画を立ててください」、「脚本全体の流れや脚本自体の特徴、テンポを考えて計画を立ててください」、「表情や声、動作など色々なことに気を配ってみてください」という指示を出すだけで、観客からの見え方を意識し、脚本の流れを意識し、自分がこれまで考えていなかった演技計画のバリエーションについても考えるようになること、そしてその結果演技計画の数も増えることが明らかになった。また、その効果は、その後、直接熟達支援をおこなわずに演技計画を立ててもらった場合にまで持続することが明らかになった。

安藤 (2011) は、演劇初心者群 (経験 1 年未満) を、望ましい演技のしかたを実践しようとする態度すらない群であり、中間群 (経験 1~5 年) を、態度はあるがそれを実践する能力のない群であると考えた [2]。能力を身につける支援には長い時間

がかかると考えられるが、態度を身につけるための熟達支援としては、簡単な指示だけで大きな効果があらわれると考えられる。

#### 問題点と今後の課題

今回、熟達支援の効果が認められたが、例えば観客への見え方を意識するような発言が増えたと言っても、ほぼ0であったものが数個になっただけであるなど、まだまだ熟達者に比べれば少ないと考えられる。また、演技計画などの産出量は増えているが、質が上がっているのかどうかについては、今回は検討していない。ほとんど考えていなかったものを、支援の結果考えるようになった、というだけでも大きな進歩であるとは考えられるが、さらに量を増やし、質も上げていくためにはどのような支援が効果的であるのか、今後検討する必要があると考えられる。

また、今回、熟達支援の効果が持続することが示されたが、実験により確かめたのは、熟達支援の直後までである。より長い期間持続するかどうかについては、今後の検討課題と言えるだろう。

さらには、今回の研究では演技計画を立てることに関する熟達支援の効果のみを検討したが、演技計画を立てるだけで演技は終了ではない。その後、立てた演技計画を遂行する必要がある、そこには、演技計画を立てる段階とはまた違ったさまざまなスキルが必要になってくるだろう。実際に演技を遂行することができてはじめてよい俳優と言えることを考えると、この段階における熟達支援についても、今後検討していく必要があると考えられる。

#### 参考文献

- [1] 安藤花恵 (2005) 演技計画の段階における演劇俳優の熟達化と3つの視点の役割. 京都大学大学院教育学研究科紀要, **51**, 60-73.
- [2] 安藤花恵 (2011) 演劇俳優の熟達化に関する認知心理学的研究. 風間書房.

#### 付記

本研究は、田泓明日香が平成24年3月に九州大

学文学部に提出した卒業論文を再分析したものである。